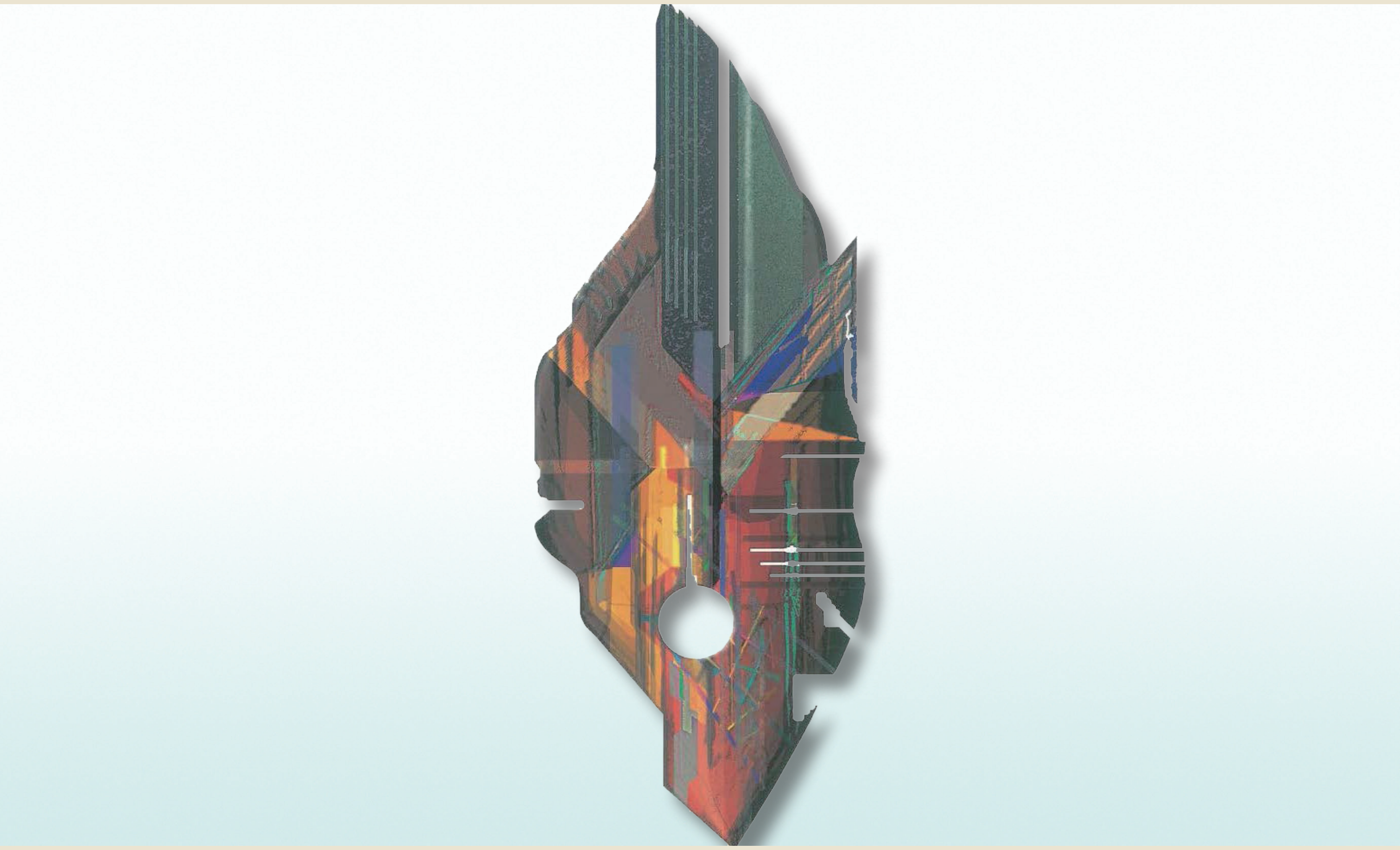
東海大学

発　行：課程資格教育センター
発行日：2019年3月31日

・本報告書は、課程資格教育センターの学部等教育研究補助金「地域連携による実践型教育プログラムの構築」、東海大学連合後援会の研究助成「市民や自治体と共働した地域文化資源（屋外彫刻）に関する保存・活用の活性化事業」、地域連携センターのシティズンシップ教育型地域連携事業「地域連動型アウトリーチ活動の最適化モデルの構築」の成果の一端をまとめたものです。

東海大学課程資格教育センター



公開シンポジウム

湘南ひらつか野外彫刻展のゆくえ
岐路に立つ彫刻

［報告書］

2018年6月17日

於　平塚市美術館

Contents

巻頭言 …… 1
課程資格教育センター准教授　篠原　聰

あいさつ
開催にあたって …… 3
課程資格教育センター所長　朝倉　徹

第一部
パネルディスカッション …… 4

第二部
パネルディスカッション …… 14

総合討論と質疑応答 …… 22

活動紹介
課程資格教育センターの実践 …… 27

巻頭言

正課外の実践プログラムの試み

篠原　聰
（課程資格教育センター准教授）

課程資格教育センター（学芸員課程）では、2013年度から博物館との連携による正課外の実践教育プログラムに力を入れています。2018年度には神奈川県立歴史博物館の角田拓郎氏（主任学芸員）の協力を得て、学芸員資格や教員免許の取得を目指す学生たちが、数回にわたるワークショップの企画立案から運営、評価改善まで一連の実務にチャレンジしました。毎回、ワークショップ終了後に学生たちは、角田氏や他の学芸員を交えてよかった点や気づいた点を話し合い、それらの内容を次回のワークショップに盛り込むなど、回を重ねるごとに「進化するワークショップ」を目指しました。会期中にはシンポジウム「ワークショップを考える―博物館を感じるということ」も開催し、現場で奮闘する学生たちの実践を報告しました。これらの取組みを通して、私は、博物館が子どもから大人まで多種多様な来館者の世代間コミュニケーションを創出する場であることや、若い学生たちがワークショップの運営以外にも他者とのコミュニケーションを通じて多くのことを現場から学びとり、肌で感じていることに、改めて気づかされました。

正課外の実践教育プログラムに力を入れ始めた理由は二つあります。一つ目は、本学が2013年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の採択を受けて実施した「To-Collabo（Tokai university Community Linking laboratory）プログラム（2017年度に終了）」との関係です。近年、社会から求められる教育の質が変わりつつあり、学生のうちから地域と触れ合い、関係性を構築することが課題になっています。学生は地域の若者として地域社会を形成する一つの力となり、また地域が若者を育てていく、そんな社会的な実践力を身につける学びの場は、大学の資格教育――学芸員課程の学びのなかにもあるはずです。そもそも博物館は社会教育を含む生涯学習機関であり、近年では「市民活動のプラットフォーム」としての機能や、課題解決のための「地域における中核拠点」としての役割が益々重要になると期待されています。そして、連携先や学びの場を、いわゆるハコモノの博物館に限定せずに地域に拓くときに着目したのが、今回の報告書のテーマである“屋外彫刻”です。

大分大学の田中修二氏と篠崎未来氏（現・小平市平櫛田中彫刻美術館・学芸員）らの自治体と市民の協働による屋外彫刻メンテナンスの取組みを参考に、2014年から本学の湘南校舎でも篠崎氏の協力のもと、屋外彫刻のメンテナンス活動をはじめました。湘南校舎には著名な彫刻家が制作した屋外彫刻が数点あります。そのことを知っている人はほとんどいませんでしたが、学生と一緒に活動を続けていると彫刻の認知度も上がり、近隣自治体からも相談を受けるようになりました。湘南校舎が立地する西湘地域は、1980年代後半から90年代にかけて小田原、平塚、秦野などで野外彫刻展が開催され、全国的にみても屋外彫刻による文化活動が盛んな地域でした。他方、屋外彫刻は公園や道路など設置場所が多様なため、所管する行政部局が一元化されていない自治体がほとんどで、設置後の管理やメンテナンスのあり方について検討される機会もなく、彫刻自体が忘れ去られてきました。野外彫刻展が行われた時期に設置された

作品の中には経年劣化による倒壊の可能性があり、事故等を未然に防ぐ必要性が高い作品もあります。屋外彫刻をとりまく景観や保存劣化の問題は、近隣自治体のみならず全国の自治体が抱える大問題です。このような地域課題に対して、大学の学芸員課程が貢献できることはないのか。そのような「想い」が本報告書で紹介するシンポジウム「岐路に立つ彫刻　湘南ひらつか野外彫刻展のゆくえ」の出発点になりました。

二つ目は、ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の推進です。2017 年に改正された「文化芸術基本法」は「年齢、障害の有無又は経済的な状況にかかわらず等しく文化芸術の鑑賞等ができる環境の整備」を掲げています。それまでの博物館は暗黙のうちに利用者を「健常者」に限定し、「障害者」を遠ざけてきました。中でも視覚障害者の来館者数は少ない状況にあります。視覚障害者が芸術鑑賞をすることは不可能なのでしょうか。私は広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館・准教授）が主宰するユニバーサル・ミュージアム研究会に参加して、「触る」ことが、目の見える人にとっても新たな気づきや世界観をもたらすことを学びました。広瀬氏は触る活動に関して「見ているだけでは気づかなかった細部の表現まで感じとることができ、作者が作品に込めた想いを知ることで作品を大切にする気持ちが生まれる」と語っています。前述の彫刻メンテナンスは、作品を実際に触れることからはじめます。手で触りながらすすめる作業は、彫刻の保守点検であると同時に、彫刻を「触って」鑑賞する絶好の機会でもあります。美術館の所蔵品を直接手で触ることは難しいですが、屋外彫刻は直接手で「触る」鑑賞が可能なのです。

2018 年に改正された文化財保護法は、文化財の保存と活用を両立させることの重要性を謳っています。また「文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について（第一次答申）」では「これまで価値付けが明確でなかった未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取り組んでいくことが重要」と述べられています。美術館や博物館は数多くの指定文化財を収蔵していますが、それらの活用のあり方について地域住民が関与する機会はほとんどありません。他方、屋外彫刻は、そのほとんどが指定文化財でないため、様々な事由により設置場所が変わったり、劣化が進み廃棄されてしまったりすることもありますが、その半面、屋外は誰にでもひらかれた空間であり、作品は未指定の文化財だからこそ、屋外彫刻のあり方やその未来については、地域住民の声をきき、自治体とともに考え、行動することが可能です。指定･未指定に関わらず、屋外彫刻は、人々にとって、「昭和」「平成」と過ぎゆく街の記憶やアイデンティティを「いま・ここ」に伝える大切なモノです。平成の時代が幕を閉じようとするいま、これらの芸術作品は、日本各地の地域の日常の情景を伝えるかけがえのない財産となります。

本学の学園マスタープランは、教育の目的を「単なる知識や技術の教授にとどまらず、ヒューマニズムに立脚した教養を重視し、人と社会と自然が共生できる文明社会を構築する力」を育てるとし、「個人・文化の多様性や価値観を受容し、相互理解を深める教育の展開」を基本方針の一つに掲げています。学芸員課程の正課外の実践プログラムが、学生、地域住民、自治体、大学をも巻き込んだ新たな世代間交流によるインフォーマルな学びの場を創出します。障害の有無にかかわらず、誰もが楽しみながら多様な価値観を分かち合う土壌を育み、地域の文化芸術について考え、行動する機運を高めてゆく活動は、本学が推進する「パブリックアチーブメント型教育（PA 型教育）」の理念にもつながると考えています。文化芸術活動を通して、市井の一人として「人間の生きることの価値」を見出すこともまた、本学が掲げる「QOL（Qualit of Life）の向上」に資する重要な要素であると確信しています。

開催にあたって

朝倉　　徹
（東海大学課程資格教育センター所長）

課程資格教育センターは、学芸員資格や教員資格を希望する学生に授業をしている教員が集まっています。

最近では、いわゆる大学の中の座学の科目に加え、なるべく学生達に課外でさまざまな体験活動をさせていこうという方針でおりまして、先日は、秦野市で屋外彫刻のメンテナンスをする企画を計画しました。

私は、中央線沿いに生まれ育ったのですが、三鷹の駅のすぐそばに国木田独歩の碑があります。「山林に自由存す」と、石碑に彫られているんですね。私が、その碑に彫られた言葉の意味を意識するようになったのは、中学生の頃だったと思います。皆さんもご記憶にあるかと思いますが、中学や高校の頃というものは、色んなことを感じている年齢でしたよね。

中学生はこうあるべし、男はこうあるべしと、当時は、そういったところで息苦しさを感じている部分もあったかと思います。「山林に自由存す、われ此の句を吟じて血がわくを覚ゆ、嗚呼山林に自由存す」と、国木田独歩の石碑はこんな一節であったと記憶しています。

その他にも三鷹には、禅林寺というお寺があり、ここには太宰治のお墓があります。

私が中学生の当時は、太宰の命日には、お墓参りに大勢の方がいらっしゃいました。きっと今も変わらずお参りの方が多くいらっしゃることと思います。その太宰のお墓の斜め前には、森鷗外のお墓がありました。

お墓が建った順番から言いますと、鷗外の方が先ですけど、鷗外のお墓には、森鷗外でなく森林太郎と本名が刻まれていまして、お墓の近くには遺言を彫った碑がありました。

その碑にも「石見の人、森林太郎として死せんと欲す」と、確か彫られていたと思います。

そういう遺言を森鷗外が考えたというのは、色々な事情があるとは思います。鷗外は、ご存知の方は多いと思いますが、陸軍の軍医総監でもありました。そこで恐らく色々と考えることがあり、友人の方に遺言を託されたのだと思いますが、一人の石見の出身の人間として死にたいと、その意をくむ形で「森林太郎」と碑に彫られることになりました。各地に残されている碑や彫刻には、それぞれの背景があるわけです。

さて、ここまで私のつたない思い出話が続いて恐縮でしたが、この平塚市内には、中央線沿線と比べてもかなり多くの屋外彫刻があると伺っております。そして大勢の市民の方々が、きっと屋外彫刻にまつわる思い出をお持ちだと思います。その思い出を、これからも大切にしてもらいたいと思います。

そしてこれから、平塚市で育ち、大きくなられるお子さま方にも、色々な思い出を差し上げてほしい。屋外彫刻の未来のためには、さまざまなハードルがあることは私達も承知していますが、今日はそういったことも含めて、豊かな話し合いができる場になればと思います。

パネリスト：屋外彫刻調査保存研究会会長　藤嶋　俊會氏
平塚市美術館学芸員　勝山　滋氏
平塚市市民部文化・交流課課長　小菅　正人氏
秦野市市民部専任参事　佐藤　正男氏
司　　会：課程資格教育センター准教授　篠原　聰氏

司会　これより第一部として、パネリストの報告に入らせていただきたいと思います。屋外彫刻調査保存研究会会長の藤嶋俊會様、平塚市美術館学芸員の勝山滋様、平塚市市民部文化・交流課課長の小菅正人様、秦野市市民部専任参事の佐藤正男様より、パネル報告をお願いいたします。

藤嶋　ただ今ご紹介をいただきました屋外彫刻調査保存研究会の藤嶋です。今日の話は、湘南ひらつか野外彫刻展の背景について、そのバックグラウンドとして神奈川県と市との共同で開かれてきた野外彫刻展の中で湘南ひらつか野外彫刻展が実現され、今日にいたっていること、そこで出てきた問題をお話させていただこうと思います。

野外彫刻とは、彫刻が野外に出るということですが、そういったきっかけを作ったのが神奈川県になります。

鎌倉の鶴岡八幡宮境内の県立近代美術館で行われてきた展覧会のなかで、彫刻というものは、野外に置かれた方がすばらしいと、彫刻らしさを発揮するという話が出てきたのがきっかけでした。

近代美術館が開館したのが 1951 年、昭和 26 年です（県立美術館としては 2016 年閉館）ので、開館からしばらく経ってそういった動きが出てきたことになります。美術展では、美術館の中だけでなく、外のアプローチを使ったりと、そういったところで彫刻の野外への進出が始まりました。

ところで今回の私についての紹介で、研究会の名称は屋外彫刻となっていますが、今使っているのは野外彫刻という言葉です。野外と屋外は同じじゃないの？　と疑問を持たれるかと思いますが、屋外彫刻とは、おしなべて建物の屋外に置くものは全てそう呼んでいいと思いますが、野外という言葉には、思想と言いますかメッセージが込められています。

彫刻が外に出る場合、野外となると太陽の光がさんさんと輝く、緑の自然豊かな地帯が野外だと言う呼び方を最初はしていたわけです。

それが、美術館の運動といいますか、動きと言ったところから、屋内彫刻が外に出て、町に出ていった。そういった背景があります。全国的な展開の中では、1960 年代の宇部市野外彫刻展や、1968 年に開かれた神戸での彫刻展が始まります。1964 年の東京オリンピックの前年には、真鶴半島で世界近代彫刻シンポジウムが開かれています。

それから神奈川県では、私鉄の東急田園都市線の駅前に野外彫刻が置かれるようになり、また 1969 年に箱根彫刻の森美術館がオープンすると、そこで野外彫刻の展覧会とコンクールが開かれるようになります。

そういう動きの中で、今度は街づくりの文脈、実際には、都市計画・再生といった文脈の中で、神奈川県内に野外彫刻が設置されてくるわけです。私は今横浜に住んでいますけど、横浜の中心部の馬車道、イセザキ・モールとか大通公園で 1960 年代から 70 年代に彫刻の設置が始まり、その成果が出てくるのが 90 年代になってくるわけですけど、馬車道やイセザキ・モール、大通公園では、単なる点としてではなくて面として、彫刻のある街づくりが実現されていきます。

また線としては、山下公園の赤い靴をはいた女の子の像だとか、公共の公園に実現されていきます。あるいは藤野町という、相模川を遡った町にある野外環境彫刻という名前も出てくるわけです。その中で、神奈川県と市町村の共同の野外彫刻展というものが浮かび上がって、秦野市と神奈川県が一緒にやった丹沢野外彫刻展というのが、最初の試みとして 1987 年に行われます。

この丹沢野外彫刻展の趣旨は、公募で展覧会を行い、終了後は町の中の適当な場所に作品を設置するという方式です。これは、宇部や神戸の野外彫刻展と同じような方式ですけれども、彫刻制作費を補助して、優秀作品には賞金を出すという方式です。これは評判を呼び、662 点の応募点数がありましたけども、当時の関係者も驚き、大変喜んだという記憶があります。

藤嶋俊會氏

審査員は、美術関係者ですけど、私も現場に何回か足を運んで見ております。このときの制作費補助が 200 万円でした。各作家に対して 200 万円を補助し、最優秀賞の制作者に 300 万円を授与する。優秀賞は 4 点でした。バブル景気の時代だったこともあって非常に潤沢な予算で行われた展覧会でした。

続いて第 2 回目は 1990 年、小田原城野外彫刻展という名称で、小田原市と県の主催で行われました。この時は 351 点の応募点数がありました。そして 3 回目が、今回の湘南ひらつか野外彫刻展でした。1993 年に行われて 411 点の応募点数がありました。賞金は大賞は 500 万円と非常にアップされまして、準大賞も設けて 1 点 300 万円、優秀賞が 4 点で各 100 万円ということでした。そして 4 回目は、横須賀で行おうかという話もあったんですけど、バブルの崩壊があって中止になりました。

その後、湘南ひらつかの彫刻展から 25 年が経つ中で、色々な問題が生じてきています。どんな問題が出ているかというと、記念碑は、その土地、その場所に関係のあるモニュメントとして置かれますが、対して、戦後の野外彫刻、あるいは彫刻の野外への進出の動きは、新しい景色の創出、あるいは、見慣れている風景を彫刻によっ

て修正する、修景という意味づけ、位置づけがなされてきました。

25年が経ち、20世紀も終わった時代の野外彫刻の問題の1つは物理的なものがあります。環境や周囲の変化、そういったものに伴う物理的な作品の劣化、あるいは、意味づけの劣化、あるいはその場の変化です。

それが彫刻にとって一番深刻な問題なわけですけど、それを将来的にどう持っていくか、それはこのシンポジウムの議題になっているわけです。私は屋外彫刻の研究会として、全国に行って、一緒に研究会に参加してきました。

事例としては、大分市、仙台市、札幌市、といったところなんですけど、大分市の場合は、大分大学と大分市という行政、それから市民ボランティアが野外彫刻に関わる活動をしています。大分市は彫刻家の朝倉文夫の生誕地に近いところで、活動が起こりやすかったという背景があります。

仙台市の場合は、ちょうど東日本大震災に見舞われた都市ということ、それから生じた活動です。明治に東京美術学校の教師たちによって作られた昭忠碑という像が東日本大震災で崩壊したあと、シンポジウムを開き、提言を行って復元までにこぎつけたというプロセスがありました。

それから札幌市では、ボランティア運営やデータベースの知識に詳しい方々がいて、その人達と一緒に、シンポジウムを行ったり、修復をしたり、そこに立ち会ってきたという事例があります。

そして、湘南ひらつか野外彫刻展の作品で、今日、平塚市内の各地、公園に設置されているものを見てみますと、備品番号はついていますし、財産として取り扱われていることが分かります。平塚市役所の前の中村ミナトさんの大賞グランプリの作品にしても、旧庁舎が解体される際に撤去された作品が、新庁舎が完成した際に設置されているということを確認したので、安心しています。

そういった実情を前にして、今日は関係者の方と知恵を絞りながら、前向きに話を進めていきたいと思っています。

勝山　平塚市美術館の学芸員をしております勝山滋と申します。今日は、東海大学の主体の取り組みでこのシンポジウムが開催に至りましたこと、おめでとうございます。よろしくお願いいたします。

今回のパネリストの中で一番微妙な立場なのが、僕ではないかと思っています。学芸員ですが、公務員という立場があり、その公務員の立場からすると話せることには制約がありますし、学芸員としてはやはり、見過ごせない野外彫刻の状況もあります。

そういう両方の天秤みたいなところがありますが、今日のシンポジウムの自分の役割としては、皆さんに火をつけ、シンポジウムを大いに燃え上がらせて、第二部のディスカッションにつなげていきたいと思っています。

平塚市美術館ができたのは1991年ですが、バブル景気が終わったか終わってないかで、まだ周りはそのことに気が付いてない頃でした。湘南ひらつか野外彫刻展は93年のことです。それからもうすぐ30年くらい経つとなると、野外彫刻も汚れたり、破損したりというものもあります。

皆さんちょっと後ろに振り返っていただいて、この会場の天井を見ていただきたいと思います。外付けのエアコンが付いていますよね。これは、どうして外付けかというと、元々設置されていたセントラルヒーティングのエアコンがもう使えなくなっていて、外付けのエアコンを付けているという現状があります。この美術館も建物の外観は立派に見えるんですけど、開館から30年近く

勝山滋氏

経つと、内側の蓄熱層ですとか、冷水器といった設備が段々痛んできています。改修工事について、美術館の責任者が市の財政と掛け合ってみても、準備と調査のお金は出ますが、その先へ進まないという現状があります。野外彫刻についても、美術館の敷地内には10点前後の作品があり、彫刻のメンテナンスをしたいという声もあります。彫刻については、平塚市の複数の課にまたがって管理していますので、美術館の人間がメンテナンスをと主張しても、それだけではなかなか進まない現状があります。

平塚市では、職員として入った人が、研修で問われる一つのテーマに、1900年と2000年と2100年の日本の人口問題があります。2000年の日本の総人口は何人か？　それは、およそ1億2000万人います、となります。では、100年前の1900年の日本の人口は？となるとおよそ4400万人でした、という話になります。そこから100年で1億2000万人になった訳ですが、研修では「2100年にはどうなる？」と、聞かれるんですね。当時、担当者の先輩職員に聞かれて、その時は分からなかったのですが、100年後に6400万人まで人口が減り、その先には、江戸時代末期の人口規模まで落ち込むと、予測がなされているんですね。

では市の職員として、予算にしても、仕事の分担内容にしても、どうすべきかということを言われます。

予算もそうですが、新しい事業をやりたいと言っても、それは右肩上がりの時代ではないから実現はむずかしい。内容を精査はするんだけども、なかなか認めることができないという状況にあります。それは全国の自治体すべてがそうだと思います。

平塚市というのは、相模湾のほぼ真ん中に位置している市ですが、神奈川県は西に行けば行くほど、自治体が貧しいと言われています。横浜や川崎が特殊なのかもしれませんが、戦前から工場もあった平塚市は、税収はあるんだけども、いつまでも豊かではいられない――予算もそのつもりで精査をしないといけないということを言われています。美術館にしても、野外彫刻をメンテナンスしていくどころではなくて、まず建物自体が保てなくなってきている事情があります。

ここでちょっと違う話をして、結論にしたいと思います。

秦野中井を東名高速から見ると、丘の上の方に以前の第一生命ビルだった建物があって、今ではブルックスというドリップバッグのコーヒーを作っている会社が、「未病の里」の一大拠点にしようとしています。最初、そこには美術館を作ろうかという話がありました。どうやらその話は立ち消えになって、BIOTOPIAというものが最近オープンになりました。今はルームランナーがあったり、反復横飛びをする部屋だったり、地元の野菜を売るブースがあったりといった施設になっています。

ブルックスの会長さんに話を聞いてみると、東京の近郊はもう開発が済み、その後、バブルの頃に横浜なり、藤沢なり、小田急沿線なりが開発されて、これからは大井松田や秦野中井や開成町、平塚、秦野、伊勢原などの東京から100キロ圏内が注目されていくということを言っています。ただ、注目されるのだけど、これから東京と同じことをやっても仕方ない、今後何をやれるか考えないといけないんだよ、ということを言われました。

そういうことを考えた中で、今後重要さが注目されてくる秦野・平塚と、この地域を捉えてみました。

それで結論を言います。先ほども藤嶋さんが、まるで僕が言いたかったことを言ってくれていましたが、なかなか市の中でも美術館が音頭を取って、何かを始めることもできませんし、彫刻にかかわる複数の課が、果たして野外彫刻のことを、しっかりと責任をもって腰を落ち着けて作家から見積もりを取って、メンテナンスができるのか。公務員というのは3年4年で異動しますし、平塚市の今後100年を考えると予算すら出ない可能性が大きいと思います。

そのことを考えると、平塚と秦野市にキャンパスのある東海大学であるとか、静岡だと三島市の日本大学といった大学から声を上げていただくと、彫刻のメンテナンスについて国や県から助成金が出る可能性があります。自治体から予算が出ない以上、美術館はそういった活路を見出す必要があるのではないかと考えています。

もう一つは、先ほど東海大学の朝倉さんが野外彫刻の思い出の話をされていましたが、やはり地域にも野外彫

刻への熱意がないと、仮に彫刻のメンテナンスができても、後はまた同じことの繰り返しで、錆びたり倒れたりといった問題につながってしまいます。

これは私達の町の彫刻だからしっかり面倒を見ていこうという自発性が地元の側にないと、将来に向かって野外彫刻を残していけないことを意味しています。

過去、日本の野外彫刻には戦時中の金属供出といった不幸がありました。『偉人の俤（おもかげ）』という戦前に出版された全国の野外彫刻についてのモノクロの写真集を見ていると、載っている彫刻が現在はもうないんですね。墓碑銘という感じの写真集です。

表現が適切でないのかもしれませんが、平成が終わろうとしてる中で、野外彫刻が再び死んでしまう、棄損してしまうという目にあっているかなと思っています。

今日の火付け役としてもう一つ、野外彫刻の問題からもっとさかのぼった、日本人の思考について言っておきたいと思います。

二宮町などでは道祖神マップを作っているのですが、日本の古くからの道祖神や石仏は、あまり広場などの真ん中に誇らしげにあるわけではなくて、路傍や道端に、振り返るとそこにあったというような種類の彫刻です。かたや、明治以降の彫刻は、ヨーロッパ的な広場の真ん中に台座の上に騎馬像といった志向のものになります。

作家の方には申し訳ありませんが、作品の良し悪しの話ではなくて、縄文や弥生といった時代からの日本人の思考を考えますと、庶民レベルでは、石仏とか道祖神といった立場の彫刻に親しみを感じる精神構造があるのではないかと思っています。

それから最近、新聞報道を賑わせているリーディング・ミュージアムという話題があります。その構想が分からない人の中には、誰か偉い人が、これは残すぞとか、これは高くなるぞとか、と選定していく話なのだと判断する人もいると思います。

野外彫刻の評価についても、これを残してこれを残さないとか、誰がそういうことを判断するのかな、という疑問もあります。

今日の話題に火が付いたかどうかはわかりませんが、以上で勝山の報告は終わりにします。

小菅正人氏

小菅　皆さんこんにちは。平塚市市民部、文化・交流課課長の小菅と申します。私からは、平成５年に平塚市を会場に開催いたしました『湘南ひらつか野外彫刻展』の開催の経過と概要について説明をさせていただきます。後半では、今回このシンポジウムに臨むにあたり、各作品について、その施設所管課からも状況の話を聞いて参りましたので、その中で主なところを紹介していきたいと思います。

本日このシンポジウムには、湘南ひらつか野外彫刻展に出展し、作品提供をいただきました作者の皆様が出席されています。本市の文化振興ならびに、野外彫刻展に付きまして、ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは野外彫刻展の説明に入る前に、本市の文化振興の歩みについて少し触れさせていただきたいと思います。

本市は文化振興と社会教育の観点で、教育委員会に社会教育課という部署を設置しております。そこでは、小学校単位で設置されている公民館、それから中央公民館、こちらを活用しながら、市民の文化活動、生涯学習、伝統芸能、文化財等、地域文化の支援を行っております。平成の時代を迎えまして、市長部局に文化行政推進室を設置しています。野外彫刻展の事務局を担当したところですが、この推進室が中心となり、文化行政の観点で文化振興の取り組みを進めてまいりました。その後、文化行政の組織につきましては、市の組織変更を経て、社会教育部の中でも、そのまま社会教育課、中央公民館と、市長部局では市民部文化交流課が、美術館、博物館とも連携をしながら、文化振興に取り組んでいます。

『湘南ひらつか野外彫刻展』では、当時新しく出来たこの部署が、多くの市民の協力をいただきながら、それから庁内の連携をはかって開催したものです。また、この彫刻展については神奈川県主催のもと市町村の自治体が協力する形で開かれました。先ほどのお話にもありました通り、秦野市、小田原市に続いて３回目として平塚市で開催しております。

平塚市の野外彫刻展の開催にあたりましては、徳島県立近代美術館館長を委員長としてお迎えして、平塚市美術館の館長、美術評論家、神奈川県立近代美術館館長、それから、県、市の職員で構成されました15人の湘南ひらつか野外彫刻展実行委員会を設置しておりました。実施にあたっては実行委員会と神奈川県、平塚市の共催で開催しております。

この彫刻展は市民と彫刻の新たな出会いの場、ふれあいの場を提供するもので、湘南のまち・ひらつかをイメージした作品を全国から募集をさせていただきました。

33都道府県、323人から411点の応募をいただいております。平成５年１月に、８人からなる審査員の方々に審査をいただきまして、入選マケットとして作品20点、それから優秀マケットとして作品31点を選んでおります。この入選作品20点は、野外彫刻展の会場となりました総合公園に展示をして、公園内の芝生それから樹木とマッチさせて、展示をさせていただきました。作品の本審査は９月に行い10月に表彰式を開催しております。当日の会場については、特に表彰式が超満員の盛況で、和やかな歓談のひと時になったとお話を伺っております。また、この野外彫刻展の開催期間中、平塚市美術館、市民アートギャラリーでの優秀マケットの展示、それから展示会場である総合公園では弦楽器四重奏の野外コンサート、日本庭園でのお茶会、それから、展示されている作品を眺めるだけでなく、作者の意図や作品の見どころなどを知ってもらおうという目的で、コンダクターが作品一つひとつを説明しながら案内する『彫刻探検ツアー』、大道芸などのパフォーマンスアートなども開催し、野外彫刻を主役として、音楽をはじめとする文化的な関連イベントを開催しながら、彫刻展を盛り上げてまいりました。

野外彫刻展は平成５年10月16日から11月23日まで、39日間を会期として、期間中のべ37万1000人の来場をいただいております。会期後は作品を総合公園に６作品、市内の公共施設・公園に14作品を移設し、市民の皆様をはじめ、多くの皆様に作品に見て触れていただけるような機会を設けております。また、平成20年には、広報ひらつかの特集として、『野外彫刻展再発見』というタイトルで野外彫刻展の紹介の方もさせていただいております。

それでは、野外彫刻展に展示されました、20作品、それぞれの現在の設置場所、それから管理しております部署についてご説明いたします。

これらのうち『REVOLVE』の作品につきましては、平塚市役所の建て替えがございまして、その新庁舎の南側に移設をしております。各作品とも施設管理者がまず安全面を最優先に、また市民の皆様に彫刻を安心してみていただけるよう管理の方に努めておりますが、作品につきましては、長年の屋外に設置ということから、色あせ、それから錆び、場合によりましては具材の腐食、傷みなどが見られている状況でございます。

具体的な例といたしましては、文化公園にあります『記憶の風景』につきましては、下の部分を支えている石の部分が破損しております。現在安全面というところで、低い柵をつけて作品を見れるようにしている状況でございます。また、なでしこ公園にあります『庭園師の夢』という作品ですが、作品の中にオレンジと緑色の部材がございます。こちらの部材が、少し落ちそうになった状況があるというところで、作品の形を維持するために、パイプで支柱をつけているという状況です。

また、大神環境事業センターにあります『隔位律Ｉ』については、現在、同センターを整備をしております。私も昨日確認に行ってきましたが、フェンスの外から作品をなんとか望める状況で、敷地の中は立ち入り禁止になっておりますので、前のように近くで見てもらうとい

湘南ひらつか野外彫刻展受賞作品一覧

作品名	作者名	設置場所	管理部署
REVOLVE	中村ミナト	浅間町 9-1　平塚市役所	庁舎
森の住人	三梨　伸	浅間町 12-41　文化公園	緑公園水辺課
円の拘束着	渡辺　行夫	浅間町 12-41　文化公園	緑公園水辺課
記憶の風景	原　一史	浅間町 12-41　文化公園	緑公園水辺課
集光影体	鎌塚　昌代司	追分 1-43　福祉会館	福祉総務課
Warring Elements　一相貫対	戸田　裕介	大原 1-1　総合公園	総合公園課
攝取不捨	池上　奨	大原 1-1　総合公園	総合公園課
STRAIN '93- Ⅱ	霜島　健二	大原 1-1　総合公園	総合公園課
聖域	水上　嘉久	大原 1-1　総合公園	総合公園課
作品 '93=CO3（ゆれるカラム）	サナダ　サダヲ	大原 1-1　総合公園	総合公園課
宙Ⅱ一海風	信ヶ原　良和	大原 1-1　総合公園	総合公園課
隔位律Ⅰ	池田　徹	大神 3230　大神環境衛生センター	環境施設課
変わりゆく湘南	花利窯	土屋 4594　七国荘	福祉総務課
HOUSE・HOUSE・HOUSE	緑川やよい	土屋 2710-1　びわ青少年の家	青少年課
集合（大地の階調）	宮崎　甲	高村 192-16　高村公園	緑公園水辺課
異民族の肖像	佐藤　慈男	平塚 3 丁目 4　四十瀬川公園	緑公園水辺課
庭園師の夢	塩﨑　由美子	撫子原 12　なでしこ公園	緑公園水辺課
ナミトナゼノオトコ	島田　憲一	高浜台 1-17　高浜公園	緑公園水辺課
向い合う存在	山崎　隆	松風町 1　なぎさ通り	緑公園水辺課
Crush Media No.5	望月　志郎	堤町 2　馬入緑道	緑公園水辺課

う状況にはなっておりません。

各施設管理者とも、先程申し上げました通り、公園、施設に設置の作品については、まず安全面に注意し、その上で、作品を楽しんでいただくことを踏まえながら、対応しているとこでございます。

ただ、課題としては先ほども出ましたメンテナンスの問題がございます。各作品の状況を、このシンポジウムでお伝えするにあたり、各部署からもらってきた意見によりますと、やはり錆び、それから金属部分の腐食や石の部分の破損が生じているという状況です。修繕についてもどういう形で対応すればいいのか検討しているところですが、なかなかノウハウがないと伺っております。

本当に繰り返しになりますが、厳しい財政状況がございます。そういう中で、作品の保守、清掃を含めたメンテナンスをどうするのか。また、庁舎などが移転しておりますが、そういう際に保管をどうするかについても、予算の確保を含めて厳しい状況でございます。各課から、同様の課題ということで報告が上がっております。

今回このシンポジウムで、いただいたご意見につきましては、各施設管理者、市の方で情報共有をはかっていきたいと考えております。また、課題としております、メンテナンス、清掃についても、この点を踏まえながら検討をしていきたいと考えております。

以上で、『湘南ひらつか野外彫刻展』の経過と概要について説明をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

佐藤　平塚市の隣町、丹沢のふもとの秦野市から参加しました佐藤です。私は現在、秦野市の生涯学習と文化振興政策を統括しておりますが、これまで文化行政関係の部署に長く携わり、また、秦野市が街中に彫刻を設置するきっかけとなった「丹沢野外彫刻展」の担当者でもあったことから、今回、パネリストとして招かれたのかなと思います。

今日は担当課の職員も何人か来ていますし、市民ボランティアの「彫刻愛し隊」の方も来場していますので、合わせてよろしくお願いします。

私は、評論家ではありませんし、学芸員でもありませんが、本日は秦野市が取り組んできた「彫刻のあるまちづくり」の概要をお話します。また先ほど来、話題となっています野外彫刻の課題についても触れさせていただきます。

ご承知のとおり、彫刻のあるまちづくりは、1960 年代の神戸、宇部での野外彫刻展を皮切りに、目に見える分かりやすい文化行政として、旭川、仙台、横浜、長野など多くの自治体で取り組まれてきました。

秦野市のきっかけは、今から 33 年前、市制 30 周年の際に、環境庁から快適環境都市の指定を受けて、市民・事業所・行政の共同作業で策定した「秦野アメニティ・タウン計画」までさかのぼります。この計画のシンボル事業の一つとして、街中に彫刻を設置し、安らぎと潤いのあるまちづくりを目指す「彫刻のあるまちづくり」が位置付けられ、事業のスタートとして、1987 年に「丹沢野外彫刻展」を開催しました。この彫刻展は、冒頭に藤嶋先生が述べられたとおり、神奈川県が会場となる自治体と共催するトリエンナーレ型の全国公募のコンクールで、その後、小田原、平塚と会場を移し、当時は神奈川方式として注目されました。残念ながら 3 回目の「湘南ひらつか野外彫刻展」で幕を閉じてしまいましたが、私には、数多くの思い出があり、このことについてお話ししたいと思います。

丹沢野外彫刻展に話を戻しますが、市にとっては初めての大きな文化事業で、いったいどのくらいの作品が集まるか大変不安でしたが、ふたを開けて見ますと、従来の彫刻展では前代未聞の 662 点の応募がありました。これは、会場が神奈川の屋根「丹沢」を背景に、その緑豊かな山並みを源とする河川いう絶好のロケーションとともに、制作補助や賞金が当時では高額だったことが、作家の創作意欲にインパクトを与えたものと考えています。

佐藤正男氏

審査の方も、三木多門、弦田平八郎、柳生不二雄、齋藤義重、佐藤忠良、堀内正和などといった、当時の美術界を代表する方々が当たり、私自身、担当者としてその方々と接する機会をいただいたことが思い出となっています。

模型による応募作品の中から 20 点を選び、本制作された入選作品は水無川河川敷と周辺の中央運動公園、文化会館、図書館の敷地内、現在はカルチャーパークという名称になっていますが、ここを会場に展示しました。展覧会終了後は、河川敷の彫刻は移設しましたが、現在、17 点が会場周辺を中心に設置されています。

続いての取り組みとして、89 年、小田急線秦野駅前の水無川に新しく架け替えられた「まほろば大橋」の完成に合わせて、供用開始前の橋の上で、「夢のかけ橋彫刻展」を開催しました。この展覧会は、幅員が車道橋 15m、歩道橋 20m と、歩道橋が車道橋より広いユニークな橋の上で、市にゆかりのある作家 20 人・26 点の模型作品を展示し、専門家の審査と市民投票により優秀作品 3 点を選び、本制作した 2 点を歩道橋の両側に、残り 1 点を付近の小公園に設置しました。

その後も、駅前広場や公園など大型な都市整備事業に合わせて、その環境と調和した彫刻の設置に取り組みましたが、94 年に「ハミングデイルしぶさわ彫刻展」を 12 人の気鋭作家による指名コンペ方式で開催し、3 点の作品を小田急線渋沢駅北口広場に設置しました。

また、98 年には、全国公募のコンクール「水とみどりの彫刻展」を開催し、237 点の応募作品から選ばれた 6 点を秦野駅南口広場に設置し、2004 年には、「おおね公園スポーツ・レクリエーションの彫刻設置事業」として、57 点の応募作品の中から 3 点を選び、新たに

整備した「おおね公園」に設置しました。本日のパネリストである藤嶋先生には、「ハミングデイルしぶさわ彫刻展」以降、審査などに携わっていただきました。

公募展や指名コンペなどで設置事業を進めてきましたが、いずれも実行委員会を立ち上げ、そこには専門家以外にも市民も参画してもらいました。これは、街中に置かれた彫刻は市民共有財産として、市民や地域が主体となって守り伝えていく必要から、地域の方々にも携わっていただきました。

また、公募展や指名コンペによるもの以外にも、オーダーメイドで、鶴巻温泉駅北口広場や公園、架け替えで新しく開通した橋の親柱などに、彫刻を設置しています。

このように秦野市の場合は、神戸や宇部のような統一的な方式ではなく、さまざまな方式で彫刻を設置してきています。このような取り組みについて色々な意見もあるかもしれませんが、平塚市のように立派な美術館がない秦野市にとって、野外彫刻という公共性を持った芸術文化資源を街中に設置してきた取り組みは、私は大変に誇りにしています。

ただ、それだけでは自己満足で終わってしまいますので、やはり彫刻への市民理解を広めていかなければいけないと考えています。この取り組みについても触れさせてもらいます。

「市民参画による彫刻あるまちづくり」の一環として、丹沢野外彫刻展の開催に合わせて、市民や市内にゆかりのある芸術家に呼びかけ、「まほろばアートフォーラム」を立ち上げました。この組織には、彫刻家や画家、版画家、建築家、大学教授が集まり、市民参画の文化事業を検討し、その結果、創作活動を通じて芸術への理解を高めようと、1987 年から、夏休みに野外で石彫づくりを行う「林間彫刻教室」と、成型したテラコッタを豪快に焼き上げる「野焼きフェスティバル」を実施し、運営もこの組織が行いました。残念ながらこの二つの事業はすでに終了し、組織も解散しましたが、ここのメンバーは、私の仕事上のブレーン的存在として、今でもお付き合いさせていただいています。

次に、市民がより彫刻に触れ合い、親しむ機会を提供しようと、2009 年から「野外彫刻鑑賞アートウォーキング」を毎年実施しています。

彫刻家を案内人として迎えたり、市内の史跡・名所めぐりも兼ねたりと、その都度、内容を変えながら行っていますが、昨年は 11 月 3 日に開催し、市内在住の彫刻家で青山学院大学教授の横山徹さんを講師に、23 人が参加しました。横山さんは、先ほどお話した「まほろばアートフォーラム」にも参画し、市内にも多くの作品が設置されています。開催日は「市民の日」として、図書館、体育館、文化会館、中央運動公園が集まるカルチャーパークで数々のイベントが繰り広げられていましたが、その中で、カルチャーパーク内の彫刻 12 点について、講師の作品解説などを受けながら見学をしました。

次に、市民ボランティアの「彫刻愛し隊」の活動を紹介します。この組織は 2005 年に結成され、現在 6 人が活動しています。彫刻を定期的に巡回点検し、簡単な清掃を行い、定期的に市と協議を行い、彫刻の日常管理と修繕への意見具申を行うことを主な活動としていますが、先ほどの「野外彫刻鑑賞アートウォーキング」の運営にも協力していただいています。また、昨年は、研修として、市職員とともに、東海大学課程資格教育センターが主催した野外彫刻のメンテナンスを学ぶ「彫刻を触る☆体験ツアー」や、公開シンポジウム「彫刻と生きる」にも参加しました。

実は、私は、この機会を通じて野外彫刻のメンテナンスを考え直すことになりました。と言いますのは、これまで、野外彫刻は屋内にある作品と違って、野外といった環境の中で風雪に打たれて汚れが生じていくのは宿命であり、必要なこと以外はあまり触らない方がいいかなと思っていました。しかし、公開シンポジウムで議論した中で、きちんとしたメンテナンスを継続して行うことが大切であることを改めて認識したところです。

少し駆け足な説明となりましたが、以上が、秦野市がこれまで取り組んできた「彫刻のあるまちづくり」の概要です。

現在は、大規模な都市整備事業がひと段落しています。そして、先ほど行政の悲観的な話がありましたが、そのことは現実なことで、人口減少・少子高齢化時代の到来で、税収の減少が加速することは目に見えています。

この状況において、少し古い言葉ですが、行政の取り組みへの「選択と集中」が益々必要となり、どうしても生涯学習、文化振興については、元々、担い手が市民だという発想から、これらの施策への予算削減が進むのが現状と言えます。また、秦野市では、「公共施設再配置計画」を策定し、これ以上公共施設の床面積を増やさないという基本的な考え方がある中で、新たな野外彫刻を設置するという考え方は難しい状況にあります。

こうした中、既存の野外彫刻を、本日のシンポジウムのテーマでもあるように、地域の文化資源として再認識し、その保存と活用をどのように進めていくのか、今後、どのようにまちづくりを進めていくのか、を考えていく必要があります。とくにメンテナンスについては、これまでも「彫刻愛し隊」と連携し、日常清掃や小規模の修繕などは取り組んでいますが、厳しい財政状況の中、本格的な汚れの除去や経年劣化による大規模修繕の対応などは課題となっています

また、時代の変遷により設置場所の位置付けや周辺環境が変化することもあり、その対応が求められることもあります。

一例を紹介しますが、「丹沢野外彫刻展」で最優秀賞を受賞した武荒信顕さんの「あなたと…時は流れて」という作品ですが、展覧会期間中は、水無川河川敷に設置していましたが、丹沢の山並みを背景に、作品名のとおり鏡面のステンレス製の円筒の動きと川の流れが、移りゆく時間を表し、非常に環境と調和していたと評価が高かいものでした。

しかし、河川法の規定からこの場所での恒久設置はできず、会期終了後に、秦野駅前に移設しました。現在周辺は自転車駐輪場と建物に囲まれているため、何でこのような場所にと、皆さん思われると思いますが、自転車駐輪場を撤去し、街中のポケットパークとする計画があり、移設したのです。しかしその後、この計画が白紙となり、現在に至っています。そして、市民の自転車ニーズの高まりに合わせて、来年 4 月の供用開始を目指して自転車駐輪場を建替えることになり、それに伴い、再度移設することになりました。

新たな移設場所について、作品のテーマや制作者の意図、周辺環境との調和などを踏まえた中で、検討には長い時間を要することになり、やっとここで、丹沢野外彫刻展の会場の一部だった図書館前の緑地を確保することができました。駐車場に隣接していますが、周辺は緑豊かな樹木が多く、また、丹沢の山並みを背景としたロケーションとなっており、作家も了解の上、32 年ぶりの里帰りとなりました。

野外彫刻の役割もそうですが、彫刻の置かれている環境は、日々、時代と共に変わっていきます。その対応をどうするか。作家が設置の際に、周辺の環境を考慮して制作した作品が、時代の流れで、そのコンセプトと違った環境が生じてくる。これらをどのようにしていくのか。

私自身、「彫刻のあるまちづくり」の最初の担当者ということで、多くの作家などからお話しを聞き、学ばせていただきました。先ほど勝山さんが、現代の野外彫刻が日本の風土や精神論に合わないのではないかという感想を述べられました。私は文化財保護も所管していますが、もちろん日本には、道祖神とか石仏といった古来の造形物が多く存在していることも承知しています。やはり野外彫刻についても時代が進み、あと 100 年後、200 年後になれば、日本の貴重な文化資源になるものと私は思います。

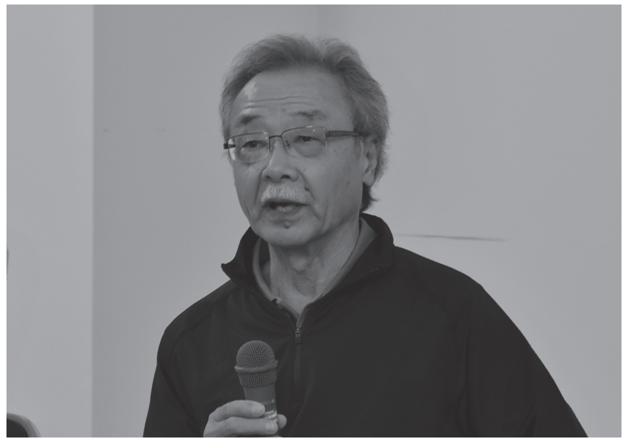
街中にさりげなく置かれ、人々の日常生活にゆとりと楽しみ、創造性を生み出してくれる野外彫刻は、都市環境整備と文化振興を進めるに当たり有用なものと考えます。しかし、一方で、野外彫刻をとりまく景観や保存劣化などさまざまな問題を抱えており、その解決は簡単ではないと考えています。この後、作家の皆さんによるパネルデスカションがありますが、ここでの議論の中から、少しでも問題解決につながるヒントを持ち帰りたいと思っています。

最後に、先ほど平塚市の場合は、彫刻の設置場所を所管するセクションがそれぞれの作品を管理していることでしたが、秦野市の場合は、文化振興所管課が一元管理しています。

大分時間をオーバーし、とりとめのない話になりましたが、これで私の報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

登壇者：池田　徹氏／塩崎由美子氏／戸田　裕介氏／中村ミナト氏／
三梨　伸氏／原　一史氏／宮崎　甲氏／山崎　隆氏
司　会：黒川　弘毅氏

黒川　今日は、午前中に文化公園と市役所の前、福祉会館で、作品の置かれている状況を見てきました。大賞を受賞された中村ミナトさんから作品制作の経緯などをお話しいただければと思います。
中村　作者の立場で申し上げます。その当時、神田にありましたときわ画廊で彫刻の発表を続けていました。そこで湘南ひらつか野外彫刻展の募集を知り、応募しました。マケット審査→実制作→賞選考という図式のコンペティションで、1/10のマケットを提出しました。幸運にも入選し実制作に入ることになりましたが、高さ36cmの模型を3m60cmの実作品へと、10倍に拡大するにはそのギャップが大きく、内包する空間をもって空間を截り外への広がりを見せたい、との思いがありましたので、1/10、1/5、1/3と段階を追ってマケットを大きくし、細部まで自分で納得した上で実制作に入りました。50個以上のパーツをボルトで繋ぎ、形にした作品でした。友人の大きなアトリエを借り、そして力も借り制作にかかりました。また、構造計算を建築の専門家に依頼し、倒壊事故の無いように念には念をいれ、地中にアングルを組みその上に作品を固定しました。平塚市総合公園にクレーンを使い組み上げるという大掛かりな作業でした。
　平塚市総合公園での展覧で大賞をいただき、私の彫刻は平塚市庁舎の前庭に設置されました。移動の際は、解体せずそのまま基礎ごと、早朝に道を通行止めにして移築したと聞きました。その折には、方向、位置確認指示のため平塚市庁舎まで出向いたように記憶しています。平塚に住む知人に前を通るたびに見ていると言われ誇らしい気持ちでした。
　設置から20年以上経ちました。その間、何度か自分の作った彫刻に会いに来ました。作品は作者の分身です。アルミの腐食が心配で来てみたり、何か構造上の変化は無いか確認に来たり、別の知人にそんな彫刻は無かったと言われて、びっくりしてまた来てみたりしました。その時はそこにあって、ホッとしました。市庁舎が新しくなり彫刻はどうなったかと心配になりました。もちろん見に来ましたが、ありませんでした。きっと捨てられてしまったんだと思っていました。
　しばらくして、偶然に出会った彫刻家から市庁舎改築のため彫刻を解体して保管してある、と聞きました。解体したものの、パーツが多くて組み立てかたが解らず困っているということで、その方に再構築のために1/3模型をお見せし、遠くから協力しました。その時不思議だったのは、なぜ初めに私に連絡が無かったのかということでした。何年経っても作者は作品に責任を感じています。今回も再構築のみならず、テーマに沿って空間との応呼を考え、より良く表せる設置場所での位置や向きのことを、立ち会って関わりたかったと思いました。
　これから、折々に現状をお知らせいただきたく作者の立場としてお願い致します。
黒川　今回、見学会で中村さんの作品を市庁舎前で見たのですが、作品にキャプションがないのです。誰がいつ作ったのか、それがどういったタイトルだったのか、なぜ作られたのか。これが1993年の湘南ひらつか野外彫刻展で作られたことが分かりません。なぜ人々の記憶を呼び起こすような表示がないのでしょうか。大変まずいことだと感じています。中村さんは、「作品は作者の分身」と言われました。作者の思いを、中村さん以外の作家の方々にも語っていただきたいと思います。
池田　私の作品は平塚市のごみ処理場、大神環境衛生センターの前庭に設置されました。私の知り合いから、市民の方々に彫刻と触れ合っていただく場として、設置さ



池田徹氏

塩崎由美子氏

れた広場を使ったイベントプランを提案され、これを手伝ってほしいという要望が寄せられたので、建てた次の年から、毎年違う演奏家にお願いしてコンサートなどのイベントを、広報や会場のセッティングを含め、こちらの自費で始めました。その時に、来た方たちに私の版画をプレゼントしたりしました。1994年から10年間続けたのですが、市の担当者が変わり状況が変わってきたので、10年間で区切って終わりにしました。
　その後、センターが新しくなるのは聞いていたのですが、3年位前にたまたま来たら閉鎖されていて、道を挟んで隣に新しい処理場ができていました。ちょうどそこにいた市の職員の方が話を聞いてくれて、その後、彫刻の状況について変化があったら教えてほしいと伝えました。3年間ほど待っていたのですが全く連絡がなかったのです。どういう状況になったのかというお知らせは早く欲しいと思っていました。
塩崎　個人的なことを申しますと、平塚に彫刻を設置してから日本を長く離れていました。私自身がこちらの公園の彫刻を確認することができない状況でした。ただ、近隣に住む友人たちに、機会があったら見に行ってほしいとお願いをしていたところ、「割と大丈夫そうだよ」ということでスナップ写真を送ってもらったりして、安心していました。
　今こちらで用意していただいた近況の写真を見ると、アーチ状になっている鉄パイプが設置当初の形に比べ倒れています。子供が楽しくなるような感覚でつくった作

戸田裕介氏

品でして、円錐のお尻の部分を叩くと、少しゆらゆらと揺れるようになっています。安全性は考えていますが、ちょうど鉄パイプが、鉄棒のようにぶら下がりたくなる感じなので、もしかしたら誰かがよじ登って遊んでしまったのかもしれないなと思っています。

　私としても普段から心配はしていたので、先ほど中村さんがおっしゃられたように、どなたか市の方から情報がもらえれば、作家も動くことができたと思います。ですから、できれば何らかの形で作家とのパイプをつないで頂いて、末永く保管出来る体制づくりをしてもらえると嬉しいと思います。

戸田　僕の作品は、総合公園にあるジャングルジムみたいなもので、横に石が立っているものです。思い出話みたいなものを含めて、2点お話ししたいと思います。

　一つめの思い出は……。湘南ひらつか野外彫刻展の期間中、僕の作品は総合公園の川が流れている場所に設置されていました。設置に先立ち、県と市の方が5人で小平市の工房まで来られ、特に設計のチェックがあったわけでもありませんでしたが、担当者の方々に、私の作品は見た目として構造的に弱いと判断されました。僕は大丈夫だと言ったんですが、とにかくしっかりした構造物を作品下部に取りつけてほしいというご要望でした。ジャングルジム状になっている作品構造の縦棒全てを最下部で水平方向に連結するかたちで、厚い鉄板を取りつけ、隣に立つ石にも同じように鉄板をつけて、「何があっても絶対に倒れないようにしてください。総合公園は広域避難場所になっているので、地震災害があったときの市民の避難場所で彫刻が倒壊しているわけにはいかないんです」と説得されました。当時、制作費補助として確か200万円頂いたのですが、作品の下に32mm厚の鉄板を熔接する作業と材料費で、10何万か余計にかかり、その分は持ち出しで制作しました。当時まだ駆け出しだった僕の立場からしたら、自分の作品に責任を取るという形で、公から求められていることを拒否して彫刻を設置するということは、年齢的にもキャリアからも出来なかった。今思えば明らかに過剰な、とにかく頑丈なものを作って設置させていただきました。

　その話しにはまだ続きがあって、展覧会会期終了後、現在の場所に永久設置されることになったとき、僕の作品の設置場所は、周囲から一段高い、誰も近寄らない場所になりました。結局、僕の作品の安全性は信用してもらえなかったのかな、という残念な悔しい思いがありました。

　ただ、正直言えば、自分の彫刻が一体どれぐらいの年月もつのかというのは、当時の僕のキャリアでは明確には断言できなかったことも事実です。そんなこともあって、現在の場所に作品が設置された後も、平塚には一年に一回、勤務する大学の授業で使う石材を真鶴で買った帰り道に必ず立ち寄って作品の状態を見てきました。6年前から石材調達を助手に任せたため、この6年は作品をチェックしていませんが、1993年に設置して以来2012年くらいまでは毎年チェックしていたことになります。汚れは目立ってきましたが、問題は何もありませんでした。

　作品は自分の子どもみたいなものなので大切ですが、だからこそ、「僕の子だから残せ」と言うことは、作者としてはなかなか言うのが難しいです。作品を後世に残していく仕事はやはり多くの方々に協力して頂く必要があると思います。

　一昨年、大分の豊後高田市に彫刻を設置しました。設置場所は潮風が当たる海岸で、作品は鏡面のステンレス製です。設置から1年少し経った昨年初夏、「ステンレスを磨いてみましょう」というワークショップを実施しました。アートワークショップの形式をとることで、メンテナンスの際に市民のみなさんにじかに彫刻を触っていただき、研磨技術を学ぶと同時に彫刻に親しんでいただく、最近はそんなことを始めています。

　もう一つ思い出をお話しします。1993年当時、設置作業中に、平塚市の担当職員の方から、「永久設置なのでよろしくお願いします」と言われました。僕はとっさに「永久って何年ですか？」と聞きました。返ってきたのは、「永久は永久です」という言葉でした。それで、「作品は永久にここに置いておいていただけるんですね」と言ったら、職員の方は黙ってしまわれました。それで僕は、「未来永劫に壊れない、そういう物はないと思うんです。屋根の下にある仏像でも、一年に一度クモの巣を取り除いたり、埃を払ったりすることで何百年も維持されています。ピカピカの自動車だって一年ただ放っておいたら走らなくても傷むじゃないですか？」という永久設置を目指すには維持管理が必要だという話をさせていただいた。そのことを、昨日のように覚えています。あれから、既に25年、月日はあっという間に経つんだなと感じます。

三梨　治安の悪い場所に設置しているブラジルの作品は、よじ登られたりしています。そうした作品は現地に行って修復したりしています。勝手に撤去された経験もあります。自分としては、永久設置だと言われて、当時としては一番保つであろうと思う方法を考えて作品を作っています。平塚ではFRPやエポキシを使っています。その後、いろいろともまれまして、今はJVとか、公共の場所でやるときはモルタルが一番いいのではないかという考えに至っています。モルタルの場合は輸送の振動に弱いので、最終的な組み上げは現場で行う必要があります。

三梨伸氏

原一史氏

自分のアトリエで作って運ぶことにしていますが、今は、躯体はモルタルで作るのが一番いいと思っています。

　自分の作品は、自分が元気なうちは自分の手で直していきたい。平塚の作品も元気なうちに補強できれば一番有り難いと思っています。

原　私の作品は現在、石の一部が割れて落ちてしまったという状況です。

　2016年12月に「原さんの作品、クラックが入っているから早く修復した方がいいですよ」というアドバイスを直接黒川さんからお聞きしました。その後、すぐに折れてしまったという連絡をいただきました。当時、黒川さんは、みどり公園・水辺課の方に彫刻を早くなんとかすべきだという提言をされたと思います。

　どのような状態か見たいと、すぐに平塚に出かけました。その時の市の職員の説明では、折れた原因は市の職員が石と組み合っている金属部分を揺らしたことで石のクラック部分が折れて外れ落ちたということでした。石と組み合った金属部分を、しかもクラックが入っているに無理に揺すれば、仮にクラックが入ってなくても折れてしまうと思います。

　これは、市の職員が市の公共財産を自ら壊したというふうに僕は捉えたんです。クラックが生じただけの状態ならば、割れて外れないように穴をあけてダボで止めて表面をカモフラージュすれば、それで応急的には修復できたと思います。それで、すぐに直して欲しいと言いましたら、予算がないという回答でした。この時の印象的

宮崎甲氏

な言葉は、「今は公園の遊具すら直せないので無理」というものでした。僕の彫刻は公園の遊具以下なんだと直感的に感じ、その時の市の職員の言葉にある種のショックを受けました。

それでも、見積もりをしてくれと言われたので、割れ落ちた石の重さが 30 キロから 50 キログらいあるものですから、それを持ち上げて接着するためのチェーンブロックを掛ける足場を組んだ方がいいと考えて、平塚市の近隣の足場屋さんに帰りの東海道線の中から電話で見積もりをお願いしました。すぐに 10 万円ぐらいで見積もりがでましたが、市からの返答は無理だということでした。

結局 1 年以上放置された状態で、現在も無残な状態のままです。僕の 30 代の代表作だと思っているのですけど、作者として非常に悲しい状況が継続しています。一刻も早く修復して頂きたいと思っています。

宮崎　私は、この平塚の作品を作る前は、カジマという会社のコンクールで 2 メートル 50 センチほどの彫刻をひとつ、同じ技法で作ったきりでした。それより大きいものを作ったことがなく、しかも新しい技法でしたので、制作には細心の注意を払い、構造的にも強度を保てるようにと鉄鋼屋さんにお願いして、ステンレスの内部構造的には非常に強いものを作ったつもりです。一つひとつは接着されているような状態ですので、誰かが悪意でもって剥がそうと思えば、いくらでも取れると言えるものです。

それで今日の午前中に、自分の作品を確認してきました。悲しかったのは、いくつか剥がされていました。誰かが人為的に剥いだのだと思います。そうとう頑張らなきゃ取れないようになっているので、網と網との隙間からねじ取るような形で取ってありました。それ自体はたいした修理にはならないので、まあ何年かに一度でも「一つ取れてましたよ」と電話でももらえれば、すぐ修繕に行けると思うのですけど、この 20 数年の間、一度も所管の方とお話ししたことはありませんでした。

それで、先ほども話を聞いて少し驚いているのは、この 20 名の作品を所管している部署が、6、7 ヵ所に分かれてあるということです。秦野市さんと比べるつもりはありませんが、こういうものに関しては、専門の方がチームでとりあえずいて下さるということが、まず必要だと思っています。所管の方々は、それぞれが転勤もあり、なかなか後に申し送りがいかないということもあり、そのあたりも改善していただきたいと思います。

私の作品を見て今日思ったことですが、設置の時も我々は思うのですが、我々作家は作品を作るのにほぼ賞金の全てを費やしてしまうものです。そのあとに植栽屋さんが来て、周りにツツジを植えていく。もしかしてこの植栽の人達よりも、我々にはお金が入っていないのかもしれない、そんなふうに笑いながら、我々は作品を作っています。

植栽はキチンとして下さればいいのですけれど、私が今日見に行ったら、周りのツツジなどはほとんど歯抜け状態になっていて、いくらでも作品に近寄れる状態になっていました。そういうところも少し目配せをしていただければ。植栽がちょっと枯れ気味だから、二つ三つ植えてあげようかと。こうした目配せが一つひとつの作品のメンテナンスだと考えれば、それほど大枚を必要とする仕事ではないという気がします。誰かが目配せをしてくださって、あそこの植栽がちょっと歯抜けになったから、今度緑を改善する際に、そこに 1、2 株植えておいてくれというような指示がいけば。あるいは宮崎の作品が歯抜けみたいになったから、もう一回きちんと接合するように作家に電話してみようかと、そのような連絡とそれができる所轄の確立と言いますか、こうした目配せをきちんとしていただければと思います。

植栽と彫刻とは、大変に関連があるものです。25 年前はそれほど高くなかった私の作品の隣にある楠の木が、もう巨木になっております。私の作品は 5 メートル以上あるのですが、木は作品よりもはるかに大きくなって、作品を覆うばかりになっている。そういうことも時代の変化とともに、やって来る変化だと思いますが、それについても目配せをしている人がいて、大きくなりすぎたから少し枝打ちをしようか、とかいう話になってくれたらと思います。そういう発想が出てくるには、やはり誰かが見ていてくださるしかないのかなと思っています。

山崎隆氏

黒川さんが重要なことをおっしゃったと思いますが、作品のキャプションと、作品についてのストーリーみたいなものが書いてあれば、その地域の人達と彫刻とをつなぐ、すごく大切なことになると思います。美術というもの自体が、「黙って見ろよ、黙って見てくれればわかるだろう」という時代から、すでにそうではなくなっていて、親しみをもつために、言葉を付け加えることが必要な時代になってきていると、私は思っています。その意味でも、私の作品と地域の人達をつなぐ何かを、また模索していきたいです。

山崎　私の作品を今日見て来ました。環境は整備されたと言いますか、作品の置かれた場所がちょっと広くなっていました。作品が動かされたのかもしれない。駅の方から歩いてきますと、この作品の背中側にロータリークラブの看板があるんですね。「地球の環境をよくしよう」みたいな金色の看板が。これを最初見てビックリすると同時に、「この作品は愛されてないな」という思いがしました。「もうちょっと彫刻にも気を配ってくれればいいのに」という思いが今日正直ありました。

私は自分の作品を愛してないわけではないのですが、自分の作品が半永久的に残ってほしいという思いはあまりありません。作家によって自己の作品に対する想いはさまざまだと思います。また、これだけの人数の作家の彫刻が、この平塚市野外に置いてあって、それをすべてキチンと保全しようっていうのは、不可能だろうと思っています。そして全ての作品が設置された場所にドンピシャと合って、市民の方も喜んでくれるなんて、ちょっとありえないのではないかとも思っています。無くなるものはなくなってしまうしかない、という思いが私にはある。私の作品は壊れにくいのですが、邪魔だと思ったら、廃棄されても別に構いません。無理やりに保存しなければということで、また違う場所に移されて、また邪魔だと思われるよりは、かえって無くなった方がいいかな、というくらいの気持ちがあります。ただ、作品を破棄する、移動する時などは作家に相談する、立ち会ってもらうというのは当然でしょう。これはぜひ、守っていただきたいと思います。

風化の問題については、現代の作品は色々な素材が使われていますから、大体において、出来た時が一番新鮮で、最高の状態と言っていいでしょう。風化していって味がでるとか、重みを増すという素材は、現代では少なくなってきています。ですから、出来た時のその感じをいつまでもメンテナンスをしながら守っていく。これはやはり、野外彫刻の大きな課題だと思います。

中村　市庁舎前に私の作品を移したとき、最初に設置し

中村ミナト氏

たときには入念に崩壊しないようにしました。今度の移設では、基礎の部分がどうなっているのかと心配に思います。どういう基礎になっているのかわかりませんので。
黒川　どうもありがとうございました。作家の皆さんそれぞれから、忌憚のないお話を伺うことが出来たと思います。ここで、作家の方たちの意見を集約させていただきます。
　作家に対して20数年間、総合公園から移設されたあとも、そのままになって連絡もなかったとのこと。作品がその後どうなっているか、彫刻に変化が起きているにもかかわらず、作家に対して連絡がなかったことを、皆さんが問題視されている。それから、作品の設置された環境が、すいぶん変わっているということ。ある場合には、作品が設置された施設が使用されなくなっていて、設置の前提そのものが変わっていたりしました。
　今回の見学会で、私達が気がついたことは、作品のキャプションや説明がないといった問題だけではありませんでした。たとえば、GLがかなり変化しているといったこともありました。GLとはグランドレベル、地面の高さという意味です。一部の作品には、周囲のＧＬの変化で作品の設置個所に水がたまるような悪条件がおきてしまっています。たとえば三梨さんの作品の基礎部分は鉄板でできていますが、今は周囲のＧＬが高くなっていて、雨が降るたびに水が溜まってそこが腐食する状況になっています。
　三梨さんの作品の隣にある渡部さんの作品は、周りの灌木が生い茂り、作品をまともに見られない状態にありました。今日はかなり刈ってありましたが、以前は、キャプションは植え込みの中に隠れて見えない状態でした。宮崎さんの作品は、元々は作品の周りに低い灌木が植えてあったという話でした。それが枯れてしまって、人が彫刻の側まで近寄れるようになったことで、彫刻のパーツが引き抜かれてしまったのだろうということでした。
　こうした現状を見ても、作品を良好な状態で見せようという意志が全く感じられません。おそらく20数年間、ほとんど洗浄もされないし、しっかりとした点検もされてこなかったのではないか。点検していくことは最低限必要です。これらのことは、誰もが感じることだろうと思います。以上の問題点が今回、作家の方々の話から浮かび上がったのではないでしょうか。
　今日は、作家によるパネルディスカッションといっても、作家同士で討論することが目的ではありません。まずは、彫刻の作家たちが、所管している平塚の行政に対して思っていることを言う。そのことが、これで実現できたのではないかと思います。
　さて、今度は逆に、パネリストの作家に対しての質問、あるいは何か言いたいことがあったら、そのことについて聞いてみたいと思うのですが。
戸田　ちょっとその前に、一言つけ加えてもよろしいでしょうか？　今日、ここから先に良い結論を得るために、皆さんお集まりだと思うのですが、先ほど申し上げましたとおり、また山崎さんもおっしゃったとおり、作家は、「自分の作品だから何とかして将来も残してください」ということは、やはり言えないと思っています。
　もう一つは、宮崎さんがおっしゃったとおり、彫刻展が行われた当時というのは、僕ら作家の方にも、やはりやりっぱなしというところがあったんだと思います。精神として、あるいは意図的に、やりっぱなしにしようとしたわけではないけれど、当時の社会、時代の雰囲気として、次々に作っていくことに集中していたのだと思います。
　だから、その反省を踏まえて、過去を振り返りながら、これから先、どういうふうにするのが彫刻のために、また地域のためにも最良なのか、という話をしていかないと、行政だけを責める形では、何も生み出していけない。
　それで、先ほども少し話しましたが、彫刻の場合、作品は作家よりも息が長いです。僕らが生きている間は、たまに自作の彫刻を訪ねて、必要があれば補修を提案したり、地域の方々と協力して実施してゆくことも出来ると思うのですが、いずれこの先に、僕らの方が先にくたばっちゃう。それを考えると、市民の方たちに、「彫刻の周りのツツジが枯れてしまっているけど大丈夫なの？」と思ってもらえるのと同じように、「ツツジの中にある彫刻が汚れているけど大丈夫？」と、もっと彫刻にも思いを巡らせていただけるようにしていかなければならない。
　やはりこれからは、作家たちが自分の作品が設置してある街に時々来て作品の説明をするとか、メンテナンスに協力するとか、あるいは今回のようなシンポジウムを開いて、地域と継続的に関わっていくということを、緩やかにでも続けていく必要がある。そのためにも、今日のシンポジウムが、作家たちが全体として持っている不満をしゃべっていったという感じではない展開にしていきたいのですが…。
黒川　戸田さんのおっしゃることは全くその通りだと思います。それで、今日のパネリストの作家たちが言ったことに対して、あるいは、作品についてでもいいのですが、質問や発言をしたい方いらっしゃるのではないかと思います。
松尾（客席）　松尾豊といいます。三梨さんにお聞きしたいのですが。作品の土台と中段で分割したパーツを接合する鉄材が腐食していたとのことですが、セラミックの松ぼっくりは、一つひとつの間に乳白状のやつが出ている。あれは、当時の技術でそうなったのでしょうか。今だったら、技術的に高くなっていて、樹脂の生乾きのときに作業しても、あんな風にはならないと思います。失礼ではありますが、ちょっと白いものが見えていて汚いと思いました。何であの様になったのか、ちょっと教えていただきたい。技術的な質問です。
三梨　これは一番下の部分で、真ん中ですよね。最後にここでボルトを入れて押し込んだんです。最初は着色したエポキシだったんですけど、それが白くなってしまっています。
松尾　彫刻を設置した環境が変わるということについて。去年、札幌国際芸術祭を見に行ったら、作品が林の中の真っ暗な中に押し込められているという感じがしました（＝環境芸術Ｑの〈北斗曼荼羅〉）。それで、子どもたちが登っていたりしているんです。作家は、そうなることも計算して作らないと駄目だと思います。作家側の哲学もあり、人によって違う場合もありますが…。
　あともう一つ。結局、行政側だけを責めても確かにダメですが、行政側の美術館の学芸員は、関わっているとなおさら苦しまれると思いますが、「アートの公共性」を問いかける中で市民たちと文化事業の共同作業を呼びかけないと先が開けない。従って、屋彫研が一生懸命にやっている保存の活動がすごく大事で、その部分は大学や研究機関と一緒になってやれば学術性を高め科研費取得の可能性もある。組織的な関りとは別に個人的にかかわる場合は、市民とつながることで、公共性を高めていく必要があります。
保坂（客席）　質問させていただきます。屋外彫刻調査保存研究会に所属する保坂と申します。今日は作品を興味深く拝見させていただきました。材質的な問題として、屋外の空間に置くにあたって、永久的に形をとどめるには相応しくないような材質のものがあるような気がしました。作家の皆さんに、ご自分で作られた作品が、今後何十年ぐらい今の形で存続できるか、という大体の試算を伺いたいと思います。
　これは、展望としての話だと、やはり作り手側の想いがこもっていたりしますので、どうしてもセンチメンタルな彫刻に対しての想いの方が優ってしまうと思うのです。でも、屋外の空間に公共物として存在する以上は、安全面が考慮されないといけないと思いますので、作家の立場としてその辺りをどのようにお考えになっているのか、お聞きしてみたいと思います。作品をジャングルジムにたとえられていた戸田さん、いかがでしょうか。
戸田　質問にお答えする前に、先ほどの話の繰り返しになりますが、たとえば真四角の綺麗な石、木でも鉄でもいいのですが、それを放置した時に形質を維持できる年数というのは、たぶん実験などで出てくるでしょう。しかし、例えばエッフェル塔などもそうですが、人間が作った物を長い年月維持出来るかどうかは、結局メンテナンスをしてゆくことが出来るかどうかが重要になってきます。
　傷が入っているかどうかを1年ごとに、あるいは2年に1回見てみることはもちろん重要ですが、少し傷があると気付いたときに補修するかどうかで、維持できる年月は全然変わってしまう。どうメンテナンスするかの計画無しで、何年持つと作品の寿命を話すのは余り意味が無いと思います。
　鉄であれば、言われているのは、腐食は1年に0.1ミリずつすすむ。そういう意味での寿命は計算すれば出るのですが、重要なことはその腐食の進行に対して、いかに補修していくかに尽きると思います。メンテナンスをしなければ、その材質がもっている耐久時間よりも早く朽ちていく可能性もあります。彫刻が置かれている環境にもよります。

登壇者：屋外彫刻保存研究会　高嶋　直人氏／平塚市民／まちづくり研究会代表　竹腰　敦郎氏／
屋外彫刻調査保存研究会会長　藤嶋　俊會氏／平塚市美術館学芸員　勝山　滋氏／
平塚市市民部文化・交流課課長　小菅　正人氏／秦野市市民部専任参事　佐藤　正男氏
司　会：篠原　聰准教授／黒川　弘毅氏

高嶋　宇部市の市民活動を紹介させていただきます。宇部市ビエンナーレ推進課が、業務内容をホームページで公表しております。ビエンナーレに関すること、彫刻に関する企画展・彫刻展の開催に関すること、市内での設置・管理に関すること、彫刻教育の推進に関すること、「まちじゅうアートフェスタの推進」に関すること、という内容です。UBEビエンナーレは1961年から隔年で継続しており、歴代の入賞作品が主に市内各地に設置されています。総数が現在207点です。屋外彫刻の修復では、今年はビエンナーレ推進課が、作品2点の修復を予定しています。

市民活動では、主に、3つのグループが活動しています。「うべ彫刻ファン倶楽部」が清掃活動・維持について、「ふるさとコンパニオンの会」がガイドについて、「UBEビエンナーレ世界一達成市民委員会」が、市民の意見の窓口になり、イベント等を企画して、市民活動が成り立っています。

私は、宇部市では行政と作家と市民との連携が取れている印象を持ちます。「うべ彫刻ファン倶楽部」のグループが結成されたときに、学芸員の方が清掃する作品の作家に連絡をとって、マニュアルを作成しています。それにのっとって、「うべ彫刻ファン倶楽部」は活動しており、この清掃活動には作家も参加することがあります。作品の修復については予算を取り、存命している作家には修復内容を相談し、作家とともに修復方針が立てられます。学芸員の方も市民活動に加わっており、毎回行われる彫刻清掃に参加して、画像記録などの情報も取っています。

この画像は、2011年に出品作家の澄川喜一先生が市制90周年事業の彫刻祭りに招待された様子です。この際も大変盛り上がったそうですが、同時に色々なイベントを一緒に行っていて、フラワーストリートと言って、彫刻の周りに花を植え、華道の先生を呼んで違う風景を作り出すことも行われたそうです。

毎回20点か30点の作品について、学芸員の方と市民の方でメンテナンスを行います。このマニュアルを見せていただいたときに、1点1点の作品ごとにメンテナンスの方法を決めていることが印象的でした。水洗いのみだったり、中性洗剤を使用したり、蜜蝋だったり、用具の指定や注意事項などがマニュアルに記載されています。

作品修復について作家の方と相談するというお話をしましたが、修復中の作品には「修復中」という札が貼ってあります。この札には作品の破損状態や再設置日程などが書かれております。「うべ彫刻ファン倶楽部」の清掃の活動中に、参加者から破損などの指摘を受けることもあるそうです。学芸員もチェックを行いながら、市民活動での指摘を生かすという体制も出来ています。

また作品のガイドとして、この画像のように207点のうち73点には銘板にQRコードがありまして、スマートフォンで説明が見られるというシステムも出来ています。

こちらの表が第1回の清掃からの記録ですが、およそ200人以上の方が参加してメンテナンスを継続しています。どの作品をメンテナンスするかというのは、学芸員の方が毎回状態を見て決めていきます。

こちらは210名が参加した去年3月の様子です。この画像に写っている幟旗なども市民、有志で作成されているとのことです。

この時手がけた2点の作品も、特別なメンテナンスは市民ではしていません。水洗いと洗剤だけです。ブロンズの作品は洗浄だけでなくてワックスも使っています。宇部で使っているこの「未晒しミツロウワックス」は、既製品のもので溶剤も必要もなくフローリング用ではありますが、一般の人たちが使いやすく、手についてもすぐに処置ができるという理由で選ばれたそうです。

脚立で高い所を拭くこともありますが、学芸員に質問したところ、大きな怪我や作品の破損などもこれまで無かったそうです。このような作業の際は学芸員の方が常についていて見守っているとのことでした。高所作業車を使っての清掃も行っています。市民活動で高所作業車を使用することは特別な事例だと思いますが、高所作業車は、NTTと中電工の参加によって無償で使用しているということでした。

ここからは関係する新聞記事をご紹介していきたいと思います。

高嶋直人氏

こちらの新聞記事（北海道新聞 2009年4月21日）は、今回のシンポジウムの冒頭に札幌の市民活動の事例が紹介されましたが、「うべ彫刻ファン倶楽部」が結成当初に、札幌の活動を見学したことが北海道の新聞で紹介されています。

こちら（読売新聞 2008年5月26日）は、「うべ彫刻ファン倶楽部」の2年目の活動が始まる頃、宇部市のロータリークラブから清掃用具の寄付があったという内容です。現在もこの用具は彫刻清掃に使用されています。

こちら（読売新聞　同上）が、「うべ彫刻ファン倶楽部」の会長さんです。僕が一番印象的だったのが、清掃の参加者に作品を触ってもらって、作品に親しんでもらうことを目的として行っているという話でした。ただ清掃をするだけではなくて、彫刻を楽しんでいるという感覚が伝わってきて、本当に一生懸命でいらっしゃいました。

最後のコメントになりますが、まず宇部市では市民が財産の素晴らしさを自覚しなければいけないということで、彫刻の維持や活用を実践されていますが、前提として住民一人ひとりが、町の中にある作品を財産だと思っているからこそ、200人以上もの参加者がいて活動が続いていると考えました。

平塚市にも彫刻を気にかけられて、活動されてきた方々、市民の方々がいらっしゃると伺っています。このように財産と思っていらっしゃった方がいながら、何かの理由で、じかに触れる機会がなくなっているとしたら、

竹腰敦郎氏

それは大変勿体ないことと思います。平塚独自の新しいこれからの活動に、何か役に立てばと思って発表させていただきました。
竹腰　肩書として、まちづくり研究会代表とありますが、これはあまり平塚市と関係のない活動でして、肩書が必要という理由でつけたものです。
　この発表ですが、黒川さん、高島さんからこういう問題があるということを聞いていました。では、どうすればいいのかということで、普段は課題解決の支援などもしているため、ちょっと考えてみました。そのときに、行政の対応はあまり期待できないという話があったので、「行政などによる対応を除く 野外彫刻の保全」というテーマでお話しします。
　まず最初に考えないといけないことは、本当に保全するのかしないのかということで、そこをしっかり考えましょうということです。保全しない場合は、将来的になくなってしまう可能性があるよ、ということです。その覚悟というか、考えを持たなければと考えます。
　保全する場合のポイントは何かというところでは、まず体制づくりが重要です。もう一つは持続できるかということで、その可能性が低ければやるべきじゃないと思っています。１回とか５回とかやっても、それを継続できないのであれば、考えた方がいいかと思います。
　保全で考慮すべき点は何かというところでは、まず人手です。それから資材、清掃用具、脚立や水など、あと資金です。資材の購入、雑費など、これらはあまりかからないかもしれませんが、やはり多少はかかると思います。そして、組織です。あと、保全サイクルということで、１回やって終わりではないので、どういう風にやっていくのか継続性を考える必要があると思います。
　あと、検討ポイントとしては、主体です。一番重要だと思いますが、これがないといずれ崩壊する可能性があります。あとは、組織と参加者です。考えられるのは、住民、地域企業・団体、学生、高齢者、作品のファンと結構幅広くなるのではないかと考えます。あとは、作家さんに協力してもらえるのか、してもらえないのかという点があります。
　保全に要する金額の話でいうと、たとえば会費として集めることができないかということも考えてよいのではないかと思います。あと、協賛を得られるのか。これはたとえば、企業とかでもいいのですが、得られたりしないかと思います。
　あとは助成を利用できるかというところです。これは県とか市とか、利用可能なところですね。それでも厳しければ、たとえば、クラウドファンディングというのを活用する方法もあるかと思います。ただ、クラウドファンディングは今流行ってますが、手数料として何割かとられてしまうので、有効ではあるもののほどほどに考えた方がいいかと思います。あと、作品ごとにチームを作るというやり方もありかと思っています。
　あともう一つ大事なのは、楽しめるかということです。嫌々ずっとやることは難しいので、楽しめないのであれば、考え直した方がいいかと思います。
　検討のステップですが、まず保全対象、どれを保全するのかをリストアップします。そして、保全に関する費用と人手を、個別にいくらぐらいかかるのか見積を出します。それをもとに、本当に保全するのかしないのか、この金額をかけてやれるかやれないかという判断をします。出来るとなった場合は、保全体制を構築しましょうという話になります。１人とか２人だと厳しいかもしれないので、どれだけの人を集めて組織としてやっていけるのか、というところです。そこまで構築できたら実施しましょうということで、逆に言えば、そこまでできなかったら断念する、せざるを得ないという風に思っております。
篠原（司会）　この第二部の総合討議では、会場も交えて、さらに意見交換を進めていきたいと思います。まず、第一部、第二部で登壇された方で、言い残したことがある方、これだけは言っておきたいってことがある人はいらっしゃいますか。
小菅　平塚市文化交流担当の小菅と申します。本日は作者の方、それから出席者の方から多くの意見が出ました。本当にありがとうございます。
　先ほど第二部の方で、保守を全くしてないのではないか、点検してないのではないか、という話がございました。その点について、状況だけ説明を補足させてください。
　公園に置いてあるものにつきましては、確かに専門性がないので、安全確認と、変わってないかどうかの確認などというところで、今どういう状況かという確認に留まっている可能性が高いのですが、年４回ほど、公園内にあるものを安全に置いてあるかどうか、どうなっているかを確認をしています。他の施設管理者も年１回、場合によっては適宜、市の財産という扱いで取り扱っていますので、確認はしている状況です。そういったなかで、変化を感じながら、なかなか対応ができてないというところは、ご指摘のとおり課題だと思っています。
　今日、お話を伺って、一番作者の方から強くいただいたのは、市と施設管理者、市と作者の方とのつながりが、今出来ていないというご指摘でした。この点につきましては、今日お越しいただいた方とは、連絡先の交換だけでもさせていただけたら有り難いと感じています。また、今日いただいた内容を持ち帰りまして、まず施設管理者に伝えます。その上で、市として何が出来るかというところは、この最終討論の内容を含めて、庁内で考えていきたいと考えております。
細井（客席）　細井 篤と申します。今、市職員の方からお話をいただきましたが、今日の皆さんの発表を聞いて思ったことは、やはり所管が一括されていない、統一されていないことが問題点を大きくしているのではないかと思います。もしこれらの彫刻を一括して管轄する部署があるならば、もう少しスムーズな対応ができると思うのですが。
小菅　現状ですぐに統一して、一括管理という形は難しいと思います。ただ、今回のシンポジウムでお話をいただきましたことは、まず関係部署から情報共有していって、どうしていくかを考えて行きたいと思っております。すみません。こういうお答えで申しわけございません。
篠崎（客席）　篠崎未来と申します。まず宇部の場合ですが、他の多くの自治体と違って、現在もビエンナーレをやっています。多くの市財をつかって、行政が回している状態なのですね。そういうところでは、過去のものを掘り起こして、今自分たちがやっていることの意義を再確認しないと、新しいことを続けて行けないということですね。そういう意味では、平塚とは大きく違います。一回時間がたって、多くの人に忘れられてしまった事業をさらに浮上させて、メンテナンスとかをするのは、パワーがいることだと思います。竹腰さんのお話にありましたけれども、そこで一度ムーブメントが起きても、それを回し続けていくというのは今まででも事例が少なすぎて、私たちが本当にこれから考えて行かなければならないと思います。
篠原　大学としての貢献ということでは、先ほど会場からいただいた意見も、もっと踏み込んでいけば、芸術をどうやって守って行くのかという問題にも踏み込めると思います。それ以前に、ディスコミュニケーションだったところに、コミュニケーションの場ができたことは大切だと思っています。これから、どこの金で誰がやるのかという問題が絶対に出てくるので、それもある程度、竹腰さんが話されたフローチャートに基づき動きはじめれば道は見えてくると思うのですが。篠崎さんから指摘があった通り、過去に１回忘れ去られたものであるということ。再浮上させるのがとにかく難しいということ。それに関しては、何かアイデアがあれば、会場の皆様からでも、ぜひご意見をいただけたらと思います。
保坂（客席）　先ほど、公共空間にある彫刻が構造面で心配があるということを指摘させていただきました。美術作品であるという観点で言えば、今日は学芸員の方がいらっしゃっているので、屋外の公共空間に置くのに相応しくないとされた作品に関しては、美術館に委託あるいは寄贈するということは、ひとつアイデアとしてどうでしょうか。美術館の中であれば、美術作品をどのよう

に管理するかが適切に把握されて、今後作品が保存されていく可能性は大だと思うのですが。

勝山　ちょっとおっしゃっている意味を取り違えているかもしれませんが、最近は市の施設でも改修するから美術館で預かってほしいとか、そういう話が美術館なりにあったりはしています。今、美術館も収蔵庫が手狭だったりして、平塚市の他の部や課からの話を、一応聞くけれど、置ける場所が今ないということがあります。

なるべく美術館以外の所管する作品は、責任をもって預かるよりは、持ち主の市のほかの部とか課にお返しする方向にいっています。

佐藤　先ほど、秦野市の彫刻のあるまちづくりについて報告させていただきましたが、実は、丹沢野外彫刻展の入賞作品で金属製の彫刻１基について、何度か補修してきましたが、将来的に維持できないという判断の中で、作家と話し合いのうえ撤去しています。

野外彫刻の保存管理に当たってはさまざまな課題がありますが、私自身としては、周辺環境に合わせて設置した作品が、その形で維持できないものになったら、その役割は終わったものと考えています。

ただ行政としては公共の財産として末永く残していくことが必要であり、そのためにはまずはメンテナンスが大切と思います。私も宇部市の状況を学んでいますが、宇部には、やはり、ビエンナーレが今でも続いているという市民レベルの事業があります。

行政というより、街全体のそうした盛り上がりがあれば、どこの自治体でもこの課題がクリアできると思いますが、秦野や平塚においても、それぞれの事情がある中で苦労しながらやっているわけです。

秦野市の場合は、新たな彫刻の設置や彫刻展の開催などは当面は計画がなく、今まで設置した彫刻の補修や活用を、市民はもとより、企業も含め、協力してやっていかなければなりません。行政としてはそういう部分を啓発していくことを進めていきますが、もうすこし市民レベルで、「おらが街の彫刻を何とかしよう」という意識が高まっていければ素晴らしいなと思います。

篠原　最後にぜひ秦野の「まほろばアートフォーラム」みたいな形で、出来れば今後は大学や自治体、市民との連携による実行委員会形式でできればと思っています。

松尾（客席）　沈んでしまったものを持ちあげるための方策として、行政は大学や研究機関から圧力をかけられることに弱いので、そこに市民との連携が加わるというのが良いと思います。

篠原　ありがとうございます。まとめていただいたみたいで。今回本当にお忙しい中ありがとうございました。

竹腰　先ほど継続という話をされていて、そこについてお答えしたかったのですが、主体というものが大事になってくると思います。その意味では、平塚にも色々な存在がありますが、東海大学の存在はたいへん大きいと思い、ぜひ活躍してもらいたいと思っています。

アートでないところの話では、大学での課外活動や、学業以外の方面に対して単位を出してあげることがあったり、あるいはゼミやサークルで取り組むケースがあったと思います。

篠原　皆様、本当にありがとうございました。今回、シンポジウムを開くにあたって、相談にのっていただいた美術館の館長代理の土方様にも色々とお世話になりましたので、この場を借りてお礼をのべたいと思います。

市民＆学生と地域の芸術資産を守る「彫刻を触る☆体験ツアー」を展開中！

篠原　聰
（課程資格教育センター准教授）

東海大学課程資格教育センターでは 2014 年度から、野外彫刻を学生や市民の手でメンテナンスし、その魅力を再発見してもらう取り組み「彫刻を触る☆体験ツアー」（以下　体験ツアー）を続けています。全国でも有数の自然あふれる校舎として知られている本学の湘南キャンパスには、北村西望作の「松前重義胸像」のほか、舟越保武作の「山田守像」、「星を仰ぐ青年の像」といった当代一流の彫刻家による作品が設置されています。体験ツアーは、これら学内の芸術資産を生かそうと、本センターが中心となって企画。屋外彫刻調査保存研究会の黒川弘毅氏や高嶋直人氏（特定非営利活動法人アート＆ソサイエティ研究センター・リサーチャー）、有限会社ブロンズスタジオ取締役の髙橋裕二氏らのサポートのもと、大分市や宇部市などの先進事例に学びながら、彫刻を清掃し、ワックスをかける活動を続けており、これまでで 200 名をこえる学生や市民が参加しています。

この活動は、本学が文部科学省の平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」に採択された「To-Collabo プログラム」の支援も受けて展開され、体験ツアーのほか、ブロンズ彫刻に関する市民向けのワークショップ、「ユニバーサル・ミュージアム」の実現を目指すシンポジウムなども開催。シンポジウムの成果を報告書にまとめて、関係各所に配布してきました。

体験ツアーは当初、学芸員を目指す本学の学生が主な参加者で、学内での認知も低いものでした。しかし、4 年にわたって継続してきたことで、最近では秦野市や平塚市などの市民の方や県内の高校生も参加するようになり、学内でも「彫刻を洗うという発想はなかったが、びっ

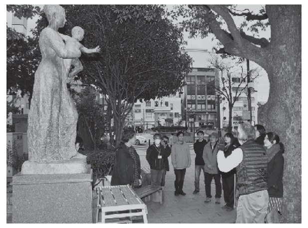
７月のワークショップ

山田守像のメンテナンス

終了後には成果を振り返り

国立民族学博物館広瀬浩二郎氏によるレクチャー

12月のワークショップ



最初は表情が
分からないほど汚れが

中性洗剤で洗い

蜜蝋のワックスを
かけてかけて手で磨くと

くりするほどきれいになって驚いた」「薄汚れている時には見ようとも思わなかったが、きれいになると自然と目が行くようになった」という声が聞かれるようになるなど、活動への認知も高まってきています。

2018年度からは 市民や行政との連携も強化

これまでの成果を受けて、2018年度からはキャンパスを飛び出し、市民団体や行政と連携した活動も本格化しました。キャンパスの枠を超えて地域と連携した教育活動への展開も見据え、本学地域連携センターの「シティズンシップ教育型地域連携事業」の取り組み「地域連動型アウトリーチ活動の最適化モデル」の一環としても実施しました。

7月29日に湘南キャンパスで行った体験ツアーには、秦野市の市民団体「彫刻愛し隊」の皆さんが研修の一環で参加。髙嶋氏や野城今日子さんらの指導のもと、本学の学生や高校生とともに山田守像と松前重義胸像のメンテナンスに挑戦しました。

12月8日には秦野市と連携して、市内の野外彫刻メンテナンス活動を初めて実施。対象となったのは、丹沢野外彫刻展の受賞作で小田急小田原線秦野駅北口にある佐藤助雄作「母子像」です。駅前を彩る作品として市民に親しまれてきましたが、隣接する植え込みの樹木の樹液や鳥の糞、排気ガスなどによって汚損が進んでいました。

当日は、髙橋氏と髙嶋氏が講師を務め、秦野市の職員と彫刻愛し隊のメンバーのほか、近隣の自治体の職員や学芸員を目指している本学の学生4名が参加しました。参加者らは、髙橋氏と髙嶋氏の指導を受けながら、現状を記録したのち彫刻を洗浄。蜜蝋のワックスをかけたのち、手で磨き上げると、参加者全員が思わず声を上げるほどの輝きを取り戻しました。

今回新たな発見として分かったのは、メンテナンス活動は市民の彫刻への興味も呼び起こす効果があることです。作業をしていると、駅前を通りがかったバスの乗客が興味深げに写真を撮ったり、通りがかった市民が参加者に声をかけてきたりする場面もあり、活動後にはきれいになったブロンズ像をスマートフォンで撮影する姿も見られるようになりました。

また、市民と学生の世代をこえた交流を促す効果もあることがわかりました。今回参加した学生と彫刻愛し隊のメンバーは、双方が初対面で、最初は緊張気味でした。それでも「彫刻の輝きを取り戻したい」という共通した目的のもと、互いにサポートしあいながら活動することで、自然と会話も生まれ、彫刻に触れる中で感じたことを笑顔で語り合うようになっていきました。

若い学生にとってはもちろん、彫刻の魅力とは何かを肌で感じる機会にもなっています。彼らは、高校までの生活の中で、彫刻に接する機会は全くと言っていいほどないのが現状です。そんな学生たちが作業終了後に、「メンテナンス活動が面白そうと思い参加しましたが、彫刻には全く興味がありませんでした。でも実際に触れると、細かい表現の違いや工夫が盛り込まれていることがわかり、魅力を感じるようになりました」「作業を終えて輝きを取り戻したブロンズ像が、『ありがとう』とほほ笑んでいるよう見えた。作品はただのモノではないと感じるようになりました」と語ってくれたことは主催者として予想以上のよろこびとなりました。

湘南キャンパスの位置する神奈川県西湘地域には、秦野市のほかにも、平塚市、小田原市といった「野外彫刻展」を通してアートのあるまちづくりに取り組んだ自治体が広がっています。その一方でこの地域は、人口減少などにともなう税収減少で行政任せのまちづくりがもはや成り立たなくなりつつあります。

その中で、「大学が果たせる役割は何か」、「単なる地域貢献ではなく、学生の教育にも生かす道はあるのか」、「先端技術との連携は模索できないか」――。野外彫刻を地域の宝として「再発見」し、さらに輝かせられるよう、これまでの活動を通して見えてきた光をより確かなものにする活動をこれからも続けていきたいと考えています。その一歩として今後、近隣自治体の担当者や学識経験者を交えた委員会を結成し、広域でのメンテナンス活動をスタートさせていく計画です。そして大分や仙台、札幌などに続く、西湘地域発信の新たなモデルを全国に発信していきたいと考えています。

センターではこんな活動も…

子ども向け造形ワークショップ
「TOKAI MUSEUM GO!!」（10月）

ユニバーサル・ミュージアムシンポジウム「近代を問い直す思想史と人類学の対話」（12月）